

間違いではないけれど

田中 愛子

あいかかわらずコロナ禍の日常である。アルファから始まりデルタを経て、オミクロン株が主な感染源となつて久しい。オミクロン株が流行しはじめたころ、岸田文雄総理が、オミクロン株に感染してもあまり重症化しないのではないかとという文脈でこう述べた。「重症化率は低い可能性が高い」。間違いではないけれど、なにか違和感を覚えた。低い可能性が高い。低くて高いというなぞなぞみたいな言い回しである。それを一国の首相が用いるのを聞いて、おやおやと思つたのである。

ほかに、間違つてはいないけれどなんだか変だなと思う表現を聞いたことがある。平山郁夫画伯らの贋作が出まわるといふ事件があつたとき、その話題をとり上げたワイドショーでアナウンサーが「目利きの腕が落ちているのでしようか」と言つていた。「腕」は、技量やたくみさ、職人などの技術も表すから、この言い回しも間違いではないのだけれど、絵画の真贋の鑑定という、目で見て評価する

話なのに「腕が落ちた」と言うからなんだかおかしい感じを受けたのだ。目利きの眼力が鈍つたなどと言えばよかつたのだろうか。

〈ほぼ皆既月食〉という曖昧を正確に言うニュースキ

ヤスター 大西淳子「コスモス」令和4年2月号

皆既月食とは、月食において月全体が地球の本影に入り、月面に太陽の光が少しも当たらない現象なのだそうである。光が少しも当たらないのに、ほぼ皆既月食ですとおかしな言い方である。月は完全に隠れたのかそうでないのかはつきりしない。そんな曖昧なことを、真面目にかつ正確に伝えるのもアナウンサーの使命ということなのだろうか。

彼岸花ほぼ同じとはみな異なる

池田澄子『思つてます』

「ほぼ同じ」は、似ているけれど違つていくということだ。埼玉県秩父より彼岸花が群生することで有名な巾着田という土地があるが、一面に咲く彼岸花にひとつとして同じ花はない。その景色を思い浮かべ、ひとつひとつの花に思いを馳せれば、この句の感覚はともよく分かる。

そういえば、最近「ほぼほぼ」ということを耳にする。

「ほぼほぼ仕上がっています」「ほぼほぼ大丈夫です」など使ひ方は「ほぼ」とほぼ同じであるが、〈ほぼ皆既月食〉

と〈ほぼほぼ皆既月食〉ではたしてどちらが皆既月食に近いのか、私にはわからない。